



## 神奈川大学フロンティアクラブ会報

発行 日 2000年3月31日  
編集・発行 神奈川大学フロンティアクラブ広報委員会  
委員長 白井 宏尚  
事務局 神奈川大学内  
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1  
TEL. 045-481-5661  
FAX. 045-491-7915

第4号

会員だより

## 地球一周に思ったこと

日本環境コンサルタント株式会社  
CH2M HILL 部長古家 秀紀  
(三八貿易卒)

ここから日本向けに大量輸出されているという。  
チューリッヒでは、同じ飛行機にニューヨークから乗り込んだアルゼンチン兵の団が国連軍のマークが入った制服を着て、どどと降り立ち、クウェートに向かう飛行

機に乗り換えて行くのを見送った。彼らは湾岸戦争後のクウェート防衛に派遣される途中だった。世界のボーダレス化は着実に進捗しつつあるとの印象を実感した。  
大学を卒業してから三十七年。会社の仕事で世界の各地に出

張したが、地球を一周する出張は初めての体験だった。それだけに成田を出発する時、母校の校歌が脳裏に浮かび「世界は呼ぶ。世界は呼ぶ」の合唱が自分の頭の中で、こだまっていた。  
高校時代の私は、ジャーナリストか貿易マンになって世界を相手にする仕事をしたいと思っていた。神大に貿易学科があることを知り受験した結果、幸い合格し以後四年間の大学生活は非常に楽しく充実した内容であった。これは偏に当時の米田学長が自慢し

ておられた優秀な先生たちによる授業を受けることが出来たこと、さらに全国各地から集まった友達に出会い親交を深めることが出来たことによるものと感謝している。  
そして貿易港横浜を舞台にした神大貿易学科の他大学にない特異性を授業の節々で感じつつ、誇りを持って勉学に勤しむことが出来たからだと思う。  
貿易立国は、わが国の宿命である。神大貿易学科が少子化をもとめせず、ますます発展することを心より望む。

## 目標達成にご協力を!!

## 母校の再開発募金

神奈川大学の再開発事業に伴う寄付金事業は、関係者の努力と卒業生たちの協力で、かなりの実績を挙げているが、まだ目標の20億円には達していない。

3月末現在の募金申し込み状況は、合計で14億4,573万円で、目標達成率は72.29%。このうち、フロンティアクラブ会員からの募金は、2,384万円。その他は、学内関係者が1,475万円、校友が469万円、企業が440万円となっている。

フロンティアクラブ募金協力委員会では、大学当局に協力する形で今後も募金協力活動を続行する。これらの募金は税金控除の対象にもなるので、会員各位のさらなるご協力をお願いする。大学の募金担当者かフロンティアクラブ事務局に問い合わせると、募金の具体的な送金方法などを教えてくれる。



この会報は、平成一十一年度は三回発行したが、一十一年度からは原則として年二回に切り替え、三月と九月に発行することになった。ただし、新事業の立ち上げなどで緊急の必要性が出た場合は、臨機応変に随時発行することを考えている。  
各委員会の活動状況は、総会での事業報告の中で簡単に紹介しているが、なかでも組織委員会が目標に掲げた会員拡大が急務である。会報でも取り上げるが、会員の皆さんのご協力をお願いする。

## 編集後記

本号は平成一十一年度のフロンティアクラブ総会の内容を中心に編集した。総会に先立って行われた神尾秀雄フロンティアクラブ代表と海老澤栄一神奈川大学経営学部教授の講演内容の要旨を二、三面に掲載させていただいた。お二人の話は、いづれも示唆に富む内容で、フロンティアクラブが初めて開いた講演会として大成功だった。



## 初の講演会を開催

## 盛大に12年度総会

神奈川大学フロンティアクラブ(KUFC)の平成一十一年度総会が二月二十六日(土)午後、横浜市内のインターコンチネンタルホテルで開催された。総会に先立って、神尾秀雄KUFC代表の基調講演と神奈川大学経営学部・海老澤栄一教授の「経営

者に求められる思考の変革」と題した講演が行われた。KUFC主催の講演会は初めてである(二人の講演内容は二、三面に掲載)。  
総会は神尾代表の開会の言葉に続いて神奈川大学の藤本盛久理事長と桜井邦朋学長の来賓二人が挨拶した。

この後、平成一十一年度の事業報告と決算報告、一十一年度の事業計画と予算の説明が行われ、いづれも原案通り承認された。

神尾代表は冒頭に「フロンティアクラブの歴史は浅いが、これから強固で健全な組織に発展させたい。大学の発展のために応援したいので、皆さんのご支援をお願いする」と力強く開会の挨拶を述べた。

来賓の藤本理事長は「フロンティアクラブの皆さんには募金や奨学金、就職支援、産官学活動などで大変お世話になっており、ありがとうございます。奨学金関係では、

村橋フロンティア奨学金の一回目の授与式が一月一日(金)に行われ、一〇人の学生に三〇万円ずつ授与した。神尾代表も出席、学生たちは大変喜んでいて、大学としても感謝している。  
大学を取り巻く状況は、ますます厳しくなっている。一八歳人口の激減で、この大学も受験生が減っている。当大学の今年の受験生は二割減にとどまった。三四〇〇人を選んでいた臨時定員(臨定)も平成一十一年度から五年かけて減らすことになっている。横浜キャンパスに建築中の三つの耐震構造新校舎は、平成一十四年初めに全部完成する。これによって大学の環境整備は整う。あとは中身が大切である。二一世紀に向けて魅力ある大学を確立するべく法人理事會、教職が一体となって努力する所存ですので、皆さんのご支援をお願いする」と挨拶した。

続いて桜井学長が「藤本理事長が話をしたが、入れ物はできる。次は中に入ってくる人たちがどうするかだ。大学自身は、受験生や社会人からあの大学へ行って学びたいと考えたらもうようにならなくてはならな



平成12年度  
神奈川大学フロンティアクラブ総会

総会終了後、懇親会に移り一年ぶりに旧交を温めた。

続いて桜井学長が「藤本理事長が話をしたが、入れ物はできる。次は中に入ってくる人たちがどうするかだ。大学自身は、受験生や社会人からあの大学へ行って学びたいと考えたらもうようにならなくてはならな

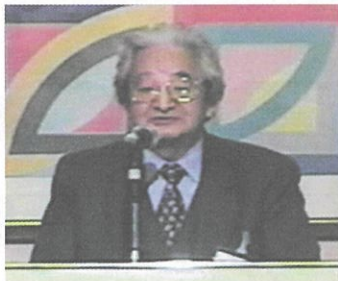
い。キャンパスは立派になる。入ってくる人たちが教育指導できる人と特性をアピールできる教科を整えていくことが大切だ。個性に輝く大学になるよう努力する。フロンティアクラブのご指導ご支援をお願いする」と述べた。  
この後、事務局から一十一年度の事業と会計について報告があった。事業報告では、この一年間の活動状況を説明し学生の就職講座に会員二人を派遣したことや村橋・フロンティア奨学金の授与式が行われたことなどが報告された。会計報告では、一十一年度の収入が入会金、会費を中心として二一〇万円、支出が二二〇万円と報告され、前年度からの繰越金を含めて次年度への繰越金は六二九万円となった。  
一十一年度の事業計画については、各委員会から報告があった。広報委員会は、これまで年三回発行していた会報を今年は三月と九月の二回に変更すると説明。組織活動委員会は、現在の会員二七〇人から一〇〇人増の会員拡大目標を設定、昭和四〇年度前後の卒業生にターゲットを絞って活動。募金協力委員会は、大学の募金協力を継続するとともに奨学金についても、村橋基金の継続を前提に基金を広く安定的に集める方策を検討すると表明。就職支援委員会は、大学就職部に協力する形で活動を強化。産官学協同委員会は、友愛と雄飛をコンセプトに大学と連携して活動する方針を示した。



# 競争と民間の力が重要

## 経済活性化の原動力

神奈川大学フロンティアクラブ代表 神尾秀雄



【神尾秀雄】  
昭和十五年横浜専門学校  
卒、トヨタ自動車工業入  
社。五八年トヨタ自動車  
副社長。六一年相談役。  
平成一〇年から顧問。

さわしい大きな変動が起こり  
つつある。

第三の変化は、環境問題への  
関心の高まりである。地球  
環境の保全が国家的なまた企  
業レベルの関心事項となり、  
環境問題対応のための技術革  
新が既存事業の競争の在り方  
を根本から変え、その変化を  
リードするものが勝ち、そこ  
で追従型の戦略を取るものは、  
場合によっては、業界からの  
退出を迫られるかもしれない  
という企業レベルの認識が出  
てきたということである。

これらの三つの変化が指し  
示す方向を一言で表現すれば  
「脱成熟化」ということだと  
思う。三つの変化が「製品革  
新」「製造革新」「販売革新」  
ひいては「経営革新」を起こ  
す方向に向かわざるを得ない  
と考える。

日本は今、長期の深刻な不  
況から完全に抜け出せずにい

て自らの需要を掘り起こし、  
自らの力で新しい雇用を創出  
し、経済の自律的な再生を  
現していかなければならない。  
政府が規制緩和などで適切な  
策を打ち出したとしても、そ  
れを活用し経済の活性化につ  
なげることが出来るかどうか  
は、結局のところ民間の力に  
かかっている。

四〇年も前の一九六〇年に  
自動車の輸入自由化が始まっ  
た。業界は大反対で「自由化  
したら日本車は全滅し、国内  
の自動車はすべて米国製か欧  
州製になるだろう」とまで言  
われた。当時、われわれは国  
際競争を勝ち  
抜くのだとい  
う悲壮なとい  
うか、開き直  
りに近い気概  
にあふれてい  
た。幸い、オ  
イルショック  
や排ガス規制  
といった難問  
を乗り越え、  
またこうした  
問題が結果と  
して燃費に優  
れた日本の小  
型車に有利に  
働いたことも  
あって日本車  
は、国際市場

に確固たる地位を築くことが  
できたと思負している。  
今から思えば、四〇年前の  
あの時に自由化を拒んでいた  
ら今日の自動車産業があつた  
かどうか分からない。そうい  
う意味で敢えて海外メーカー  
との競争を受け入れたことは、  
実に正しい選択だったと、し  
みじみと思う。

企業の中においても全く同  
様である。企業の中に競争的  
な環境を常につくることが企  
業組織を強くする一番の早道  
であり、それが経済の活性化  
につながる。



米政府が一九八〇年代から進  
めた規制緩和や税制改革など  
の政策が民間企業や個人の活  
力を促していることが、基本  
的背景となっていると思う。  
日本政府も、さまざまな経  
済対策を打ち出しているが、  
経済の成長、発展を担うのは  
産業・企業自身の力である。  
われわれ経済人は、より魅力  
的な商品、サービスを開発し

# サイズ、地域を超えた

## 企業経営の萌芽

神奈川大学経営学部教授 海老澤 栄

栄 一(四〇年卒業)

費者は自己満足の世界に入り  
込んだ。その結果、二一世紀  
を直前に控え、地域的規模で  
さまざまな複合的ななみをも  
もたらした。経営の標準化や  
単純化、一様化、均質化、同  
質化、マニュアル化などは、  
企業規模の拡大を促し、その  
大半は大量生産、大量流通、  
大量販売、大量消費、大量投  
棄、大量焼却などがある意味  
で正当化した。

自由競争という御旗のもと  
でのなりふり構わない企業行  
動は、生態系の破壊や環境汚  
染、バージン資源の枯渇化推  
進などエントロピー増大の道  
をひたすらたどることになっ  
た。株主や債権者、消費者な  
どに代表される直接的な利害  
関係者にのみ貢献する企業は  
もはやその存在基盤そのもの  
が問われている。わがままな  
消費行動をとる消費者も同様  
である。今われわれに求めら  
れているのは、発想の転換で  
あり行動前提を見直すことで

ある。  
地球資源の視点からいえば、  
大量消費、投棄、焼却に結び  
つくような経営スタイルから  
の離別が可及的速やかに求め  
られる。需要予測を基盤にし  
た見込み生産方式に終止符を  
打ち、受注生産方式に切り替  
えるような社会システムを構  
築することがまず第一の解決  
課題である。ベネトンの後染  
め方式、スカニアのモジュー  
ラー方式、KOAの半製品方式な  
どは、この流れを先取りして  
いる事例として認識されてい  
る。

第二は産業間で資源のやり  
とりをする、いわゆる産業循  
環モデルの設計である。環境  
の側に一方的に出すゴミの量  
を極力少なくする努力がすべ  
ての企業に求められているの  
である。経営資源の社会資源  
化の動きである。

必要に応じて必要なサービ  
スを市場で提供するという経  
営理念が確立すれば、過剰設  
備を維持するために発生する  
費用への配慮は少なくとも不  
要になる。オンデマンド方式  
を実現するために必要となる  
条件として考えられるのは、  
◇得意技、例えば削る、運ぶ、  
塗る、記憶する、伝えるなど

◆若干の提言  
必要に応じて必要なサービ  
スを市場で提供するという経  
営理念が確立すれば、過剰設  
備を維持するために発生する  
費用への配慮は少なくとも不  
要になる。オンデマンド方式  
を実現するために必要となる  
条件として考えられるのは、  
◇得意技、例えば削る、運ぶ、  
塗る、記憶する、伝えるなど

の基本技を持つこと◇相互に  
異なった得意技を持つ企業同  
士が緩やかに結合すること◇  
単なる価値分配ではなく、価  
値増殖や価値創造の道を常に  
模索すること◇あらゆる手段  
を使って情報発信型や模索型  
の経営を展開することーなど  
である。

インターネット時代の企業  
は、そのロケーションや大き  
さはあまり大きな問題ではな  
い。空間や時間を超越したユ  
ニークな発想を経営に取り込  
むことが重要課題になってこ  
う。

# 10人の学生に初の授与

## 村橋・フロンティア奨学金

フロンティアクラブの会員である村橋三  
好さんからの寄付金を基にフロンティアク  
ラブの協力で設立した「村橋・フロンティ  
ア奨学金」の初めての授与式が一月一四日  
(金)に行われた。  
式には、神尾秀雄フロンティアクラブ代  
表が出席、藤本盛久神奈川大学理事長から  
一〇人の学生に奨学生章と各三〇万円の奨  
学金が渡された。第一回の奨学生一〇人は、  
応募した学生六四人の中から選ばれた。奨  
学生を代表して貿易学科一年の藤田聡子さ  
んが「村橋・フロンティア奨学生として採  
用されたことを感謝し、誇りに思い、胸を  
張って学んでいきたい。社会に貢献できる  
人間になりたい」と謝辞を述べた。



### ◆二〇世紀の企業経営



米国を中心に興った二〇世  
紀の企業モデルでは、作業の  
標準化、単純化を通じた効率  
倍率、生産性向上が中心課題  
であった。勢いその方向は、  
規模の拡大や成長であり、市  
場の占有率を高め競争に勝つ  
ことであった。この流れを一  
般化すると、二〇世紀はモノ  
やカネに価値の中心を置く物  
質文明の世紀でもあった。商  
品のライフサイクルは短くな  
り、市場にはモノがあふれ、  
消費者は使い捨て文化に慣れ  
物品の過剰状態が恒常的に発  
生した。  
企業は私利私欲に走り、消